

情報ってWordですか、 Excelですか？

若山 公威

どうしたものか、という思いだった。私は総合教養という、いわゆる一

般教養だけを担当する組織にいたものの、二〇一五年度から世界教養学科ができるということで、その所属になった。これまで、主に一、二年生向けに情報教育をしていれば良かったが、新たに学科の学生の面倒とゼミの担当も加わった。前任校では、学部生・大学院生の卒業研究の面倒もみていたが、工学部の学生である。本学の学生に対して、ゼミで何を教えたものだろうか。私の専門である情報工学の卒業研究では、新しい方式や適用的分野を考えて、プログラミングして動かしてみようという流れになる。プログラミングは道具である。本学の学生の場合、プログラミングを教えるだけで終わってしまうだろう。そもそも、プログラミングには興味を持たないのではないか。本学に着任した当初、「プログラミングってWordですか、Excelですか？」と聞かれたことが記憶に残っている。WordやExcelといったソフトウェアの操作をマスターしたい、それが情報科目であるという意識の学生が多い。でも、それだけではないことを知って欲しい。

本稿では、私が世界教養学科に所属してから、主に一期生が卒業するまでの四年間に新たに担当した授業とゼミについて振り返ってみたい。

世界教養学科には文学、哲学、宗教、芸術という四つの大きな柱があると言われている。このどれにも属さない情報分野を担当している教員の話ではあるが、世界教養学科という幅広い学問分野を対象とする学科の今後のあり方に多少でも役立つことがあれば幸いである。



新学科は大混乱のなかスタートした。一期生が入学する四月からの一部授業の内容や担当者が、直前の二月末時点で何も決まっていなかった。ようやく三月に入ってから話が決まり、今後の見通しが立ってきた。ゼミが始まるまでには二年ある。その前に、導入科目「日本理解の方法」、応用科目「情報とコミュニケーション」といった新しい授業を担当することが決まった。

「日本理解の方法」は、「人間は幸せになるために何をしてきたのか」という問いを主題に据えた一年生向けのオムニバス講義であるため、インターネットや情報システムの技術そのものの話をすることはふさわしくない。そういった分野で主題に合うテーマを考えた。

最初の年は、当時一般人にも認知が広がり始めていた人工知能の歴史と現状の話をした。もともとは人間が幸せになるために人工知能を開発してきたものの、今では仕事が奪われるとか人工知能に支配されるとか騒いでいる人もいる。あまりセンセーショナルにならないように、技術的に現状でどこまでが可能なか伝えた。この授業を受講して、英語の授業でエッセイを書くときに人工知能について調べ、卒業研究も人工知能についてまとめたと報告してくれた学生がいた。わずかな学生かもしれないが、興味を持たせることができたようである。

「情報とコミュニケーション」は世界教養プログラム応用科目の二科目であるため、日本だけではなく世界の様々な地域に関りを持たせたい。技術的な話はほとんど触れずに、一ユーザーとして、インターネットが社会にどのような影響を及ぼしているか、世界と日本の動向を話した。アラブの

春、ウイキリークス、スノーデンといった内容も入れていった。ウイキリークスやスノーデンといった内容には興味を持ってくれたようで、これは本当なのかと、授業後に聞いてくる学生もいた。

東日本大震災時のソーシャルメディアの活用事例や、ネット選挙、ネット炎上など、ソーシャルメディアに関する割合も増やした。ほとんどの学生がSNSを利用しているので、身近な内容であったと思う。毎回、課題として簡単なレポートを書いてもらっている。その日のトピックに関するもので、例えば新しいWebサービスを提案させたり、位置情報を用いたサービスを提案させたりしている。ありがちな回答の中に、たまになるほどと思えるサービスの提案などもある。ゼミでも、この授業の内容をもとに、演習を加えて行こうと考え始めた。

なお、この応用科目は全学科の学生が受講できる。何となくではあるが、世界教養学科の学生はしっかり聞いてくれる割合が高い。といっても、もちろん全員という訳ではないが。他の学科生だと、とりあえず単位を取るためという感じの学生が割合として多い気がする。しかし、これまで三年間授業をやってきて、授業の学期後も研究室に質問や相談しに来る他学科生がいる。入学時にはつきりとやりたいことが決まっていない学生が多いのが現状である。私のような特殊な分野のゼミについては、他学科の学生も希望すれば履修できるような柔軟な運用ができないだろうかと思う。

振り返ってみると、導入科目、情報システムに関する講義、応用科目、プログラミング言語、ゼミと、順番に履修してくれるとソーシャルメディアとプログラミングについて学ぶには多少それらしい形になった。実際には、学生は一つか二つの科目だけつまみ食いするのが現状であるが。



新学科二年目の半ば、ゼミ生の募集が始まった。ゼミの定員は十名である。そこへ十名希望者が来た。最初は正直うれしかった。今思えば、大

きな思い違いをしていたのだが。

世界教養学科では、三年のゼミは半年ごとに別のゼミを選択できる。四年のゼミは一年間同じだが、三年のゼミから変更しても良い。半年だけ私のゼミを受けて、他のゼミに行く学生もいるだろうと思う、三年一期のゼミでは内容を詰め込んだ。これまでの授業で行ってきたトピックについてさらに詳しく説明したり、新たに用意したトピックや最近の話題などを次々に紹介したりした。この結果、演習時間をほとんど削ってしまった、通常の講義科目のような形式になってしまった。その代わりに、各自で興味持った内容の演習をするよう促した。当時たまたま、ドコモ東海主催のスマホアプリのコンテストがあった。アプリ開発だけでなく、アイデアをまとめて発表するだけでも良くて、選ばれれば賞金がもらえるというものだ。近隣の文系大学の学生もチャレンジしている。これは良いチャンスだと思って、考えてみないかと言ったが反応なし。皆さんはITに興味があるんでしょ、こんなに面白いことがあるんだ、やってみないか、と投げかけたが、全くボールは返ってこなかった。教員が面白いと感じることを、学生が同じように思うわけではなかった。

あらためて、ゼミを希望した十名の希望調査時に書いてもらった理由を見てみる。すると、パソコンによる文書作成やプレゼン資料作成能力を高めたいといった「情報リテラシー」授業の延長のようなことをしたという学生が四名、ソーシャルメディアに興味がある学生が四名、プログラミングとWebデザインに興味がある学生が一名ずつである。「情報リテラシー」授業のようなことをしたいという学生に詳しく話を聞くと、WordやExcelの使い方方をマスターしてパソコン資格試験に合格したいなどと言っている。もちろん、このゼミではこのようなことは全く目指していない。それ以外の学生については、本ゼミの趣旨にふさわしい理由が見えるが、実際に話を聞くと、希望調査時に仕方なしに社会科学系の分野に興味があるが本学科にそのような系統のゼミがない、

という理由で私のゼミに來ている学生がいる。世界教養学科では幅広い学問分野について学ぶことができるかと宣伝しているが、結局ゼミは人文系がほとんどである現状は何か改善する必要があるだろう。

留学や語学関係についてみると、ゼミ一期生で長期海外留学へ行った学生は一名だった。外国や外国語に興味がある訳ではないという学生が多い。

今のゼミ三期生に、学科にどのようなゼミがあると良いかアンケートしてみたところ、食文化が三名と最も多かった。あとは一人ずつで、ビジネスや経済、国際開発やNGO、世界の観光地、スポーツ、機械工学、宇宙関係、環境問題と実にバラエティ豊かな回答をしてくれた。

良い話としては、ゼミ一期生のうち、私が担当している応用科目を履修していた学生が十人中七人いた。やりたかった分野は無かったのかもしれないが、応用科目を受けて情報分野に興味を持ってくれたのならうれしい限りだ。

新学科でのゼミの仕組みを構想していたときは、三年のゼミはお試し期間とみなされて、半年でゼミを変わる学生が多いだろうと想定していた。だが実際には、三年一期に配属となったゼミを、そのまま二年間履修するという学生がほとんどという結果となった。第一希望のゼミに入れなかった学生も、来期希望のゼミへ再挑戦するのではなく、そのまま留まっている。環境の変化を嫌うということだろうか。実際受講して貰ったら興味を持ってくれたということなら良いのだが。

卒業後、大学で英語以外に何を勉強したか聞かれたら、世界教養学科の学生にはせめて一つは自信をもって答えて欲しい。このゼミに來た人たちにも。ただ、その思いが強すぎて半年で完結させるために空回りしてしまった。気を取り直して、二年のスパンで考えることにした。



二期生の三年生ゼミでは、演習時間を増やした。そして、できるだけ

グループで作業するようにした。知識やスキルの個人差を埋めるためだ。関連授業は全く履修していない前提ですすめた。悲しいことではあるが、自主学習は期待しない。こちらから関連書籍を提示して、担当を決めて読ませるようにした。応用科目を履修した学生には一部重複する話もあるが、良い復習になるだろう。最終的に、ITや情報メディアに興味を持つてもらうことが目標である。プログラミングの演習も行ったが、基本的な部分にとどめた。

教室外での活動も行うようにした。ソーシャルメディアから見える世界もあるが、現地で見えるものもある。ITは地域を活性化するためにも活用できる。そのようなツールとしてオープンストリートマップ、ウィキペディア、ローカルウィキといったサービスを経験してもらった。これらのサービスでは、ソーシャルメディアの特徴である双方向性を体感することができる。

オープンストリートマップは、インターネット上で地図を作るクラウドソーシングプロジェクトだ。インターネット上の地図と言えばグーグルマップが有名だが、これは印刷物を配布する場合などに制限がある。オープンストリートマップでは、印刷物の配布やデータ利用を自由に行うことができる。サービスを利用する立場だけではなく、提供する立場になることで、感じることもあるだろう。海外では、車椅子で入れる店舗情報を集めて公開するプロジェクトや、発展途上国での災害時に地図を作成することで復旧活動に貢献するプロジェクトが進んでいる。こういった活用に興味を持ってもらいたい。

ゼミ生全員ウィキペディアは知っており利用もしているが、実際に編集した学生はいなかった。長久手市には史跡が多くあり、まだウィキペディアに書かれていない内容も多くある。長久手古戦場駅周辺へ出かけて史跡の現地調査を行い、図書館で書籍を調べ、ウィキペディアの編集をした。誰でも編集できるということは知っているようだが、実際に体験することで、厳密なルールに従い作業をしていることが理解できた

思う。ただ、ウィキペディアは難易度が高い。比較的簡単に編集ができるローカルウィキも演習に取り入れた。これは、地域の情報を記述して公開するウィキシステムで、主観的な情報も掲載できる。大学や大学周辺の情報更新を行った。

これらの成果かどうかは分からないが、二期生や三期生では、SEなどのIT系への就職も視野に入れている学生が出てきた。

なお、現在のゼミ三期生は、これまでの一期や二期生とは違って、みんな仲が良い。第一希望で他ゼミを希望していて、定員の関係で本ゼミに回された学生が元気で他のメンバーをまとめているみたいだ。これまでのゼミ生は第一希望の学生ばかりで全体的におとなしかったが、それ以外の学生が来るのも良い刺激になることが分かった。



四年生ゼミでは、まず半年かけて卒業研究のテーマを考えてもらった。テーマを選ぶ際には、ネット検索した内容や文献をまとめるだけのものではなく、自身でデータ分析、開発、制作、現地調査、アンケート調査、インタビューのいずれかを行うものにするように説明した。実際に、自分で手を動かして仕上げてほしいと説明した。

ゼミ一期生のうち、ゼミに入る前からプログラミングを勉強していた学生は、プログラム制作を行った。それ以外の学生は、ソーシャルメディアの調査、WebやPOPなどのデザインに関する調査や制作を行った。この卒業研究の中から、I君による大学生のスマホ利用実態調査を紹介する。この研究では、まず学内の食堂とスクールバス降車場でのスマホ利用状況を調査した。例えば、コミュニケーションプラザでの利用率はほとんどの日で三〇%から五〇%となっている。数値の高さも驚きだが、この調査をしているときに学生が気付いたことを、論文から引用する。

昼食時に、スマホを使っている学生が多いが、右手付近のすぐ手に取れる場所に置いている学生の多さに驚いた。加えて、その学生と一緒にいる

友人が同じくスマホを身近な場所に置いている割合は、データは取っていないが私の目では九割以上だと思う。そして、友人がスマホを触り出すと、すぐさま自分のスマホを手に持ちSNSをチェックする学生がそのうちの八割以上いる。

こういったことは実際に現地で調査してみないと分からないことだと思う。また、本学だけではなく、名古屋大学内の学食での調査も行っている。調査した三つの食堂では六%から九%という低い値だった。食堂の混雑状況が違う可能性があるため注意が必要だが、これだけの差があるので驚きである。

現在、ゼミ二期生が卒業研究を進めている。ゲーム好きな学生はeスポーツについて、カメラマンとして稼いでいる学生はSNSにおける写真のモラルについて、図書館司書を目指している学生はバスファインダーについて調べている。SNSでのフォロワーを増やしビジネスにつなげたいと考えている学生もいる。学生の好きなことをさせている。



学科のカリキュラムが変更になり、二〇二〇年度からは「情報システムとAI」というコース科目を担当する。この科目を履修して興味を持ちゼミに来てくれると良いのだが、そもそも、この科目を取ってくれるだろうかと思っている今日このごろである。「システム」や「AI」という言葉が入っていると理系の科目のような感じがして、ほとんど受講生が来ないのではないのだろうか。ただ、どの大学でも変わり者はいるのである。そのような学生のための場所であり続けたい。